



大自在

かつて富士山の伏流水があちこちで湧きだし、せせらぎが美しい景観を醸し出していた三島市は間違いなく水の都だった。川端は野菜などを洗う女性たちが世間話に花を咲かせる場であり、子どもたちの遊び場だったことだろう▼「だが、何てったってあの透き徹る冷たい清水。天の甘露よ 地の玉露」。おととい86歳で亡くなった詩人で、文化勲章受章者の大岡信さんが古里三島市で過ごした幼い頃の情景をうたった詩「三島町奈良橋回想」(三島ゆうすい会10周年記念誌)の抜粋である▼その豊かな湧き水も戦後の高度経済成長とともにかれ始め、同時に川の汚れも目立ってくる。せせらぎ復活へ市民団体の果敢な挑戦が始まった頃だから、もう二十数年前になるだろうか。三島支局に赴任し、取り組みを取材した▼手弁当で環境美化に加わった市民らの合言葉になったのが「右手にスコップ、左手に缶ビール」。市民が率先して動くの思いを込めたものだ。合言葉は大岡さんの考えも参考にして生まれたと、きのう聞いた。分かりやすさが大事と大岡さんはアドバイスしたという▼市民有志が作ったNPO法人「グラウンドワーク三島」の名譽顧問も当初から引き受けた。「継続することは難しいが、続けることで価値が生まれる」。長年、活動してきた渡辺豊博さんは大岡さんの言葉に何度も励まされたそうだ▼市民活動の象徴となった三島市の中心部を流れる源兵衛川は今や、市内外の人々にぎわう観光スポットになった。終生古里を愛した大岡さんの思いが通じた清流再生でもあろう。